

研究課題	学びにくさのある子どもたちが正当に評価されるための手立てを探る
副題	～読むことや書くことに困難がある子へのテスト場面での ICT を活用した合理的配慮の実践と検証を通して～
キーワード	特別支援教育 テストへの ICT 活用 合理的配慮
学校/団体名	公立松江市立島根小学校
所在地	〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1325 番地 1
ホームページ	https://www.city.matsue.ed.jp/shimane-e/

1. 研究の背景

近年、児童生徒数は減少傾向にあるのに対して、通常学級で特別な支援を要する児童生徒は約 8.8%に達し、読み書きに困難を抱える LD 層への ICT 支援の有効性は周知されている。しかし、大学入試での合理的配慮申請は全志願者の約 0.8%に過ぎない。

学校現場には「全員同一条件」という過度な平等観が根強く、テストでの配慮が躊躇される傾向にあるが、これは学びの権利を阻害する社会的障壁に他ならない。誰もが実力を発揮し正当に評価される権利を保障するため、テストにおける ICT 活用の提供方法と課題の検証は急務であると考えた。

2. 研究の目的

誰もが自分の力を発揮して正当な評価を受ける権利を守るために、テストにおける ICT を活用した合理的配慮の提供方法や課題について検証していく。

3. 研究の経過

従来のテストは、内容の理解度以前に「読み書きの技能」がボトルネックとなり、学びにくさを抱える児童の学習成果を正確に測定できていない現状があった。この評価の乖離を埋めるには、ICT による代替手段の検証と同時に、提供側である教員の意識改革が不可欠な両輪となる。

本研究では、複数の支援手立てを検証するとともに、「全員同一」という平等観を問い直し、個に応じた環境調整が正当な評価を担保する「実質的な公正」であるという認識を共有した。手法と意識の双方からアプローチすることで、誰もが実力を発揮できるテストのあり方を探った。

(1)個に応じた手段選択のための複数の手立ての検証

① 音声情報の提供に関わって

音声情報の提供方法	提供側の準備の負担	子どもの操作の負担	ハイライト表示	聞きたい場所の探しやすさ
① 市販テストの読み上げデータの活用	○	○	×	×
② 音声ペンの活用	△	○	×	○
③ 端末のテキスト認識機能の活用	○	△	○	○
④ 専用サイトの活用	○	○	○	○

※「△」→他の手立てに比べると負担がある・量や対象によっては負担がある

「×」→提供がない・負担が大きい

② 入力方法に関わって

入力方法	必要な主なスキル	メリット	デメリット・課題
① 音声入力	言語化能力、修正能力	速い、運筆負担ゼロ	環境(騒音)に左右される 同音異義語の誤変換に注意
② ローマ字入力	ローマ字のルールを理解 手指の巧緻性	標準的 汎用性・将来性が高い	習得に時間がかかる、 「音→文字→ローマ字」と複数の 変換が必要で、負荷が高い
③ 50音 キーボード	50音表の並び方の理解	低学年から使える	文字を探す負担が大きい 長文を書くには効率が悪い
④ フリック入力	方向感覚、微細運動	情報が少ない 動きが最小限	画面が狭くなる 方向と音の結びつきが必要

※予測変換の扱い：漢字を書く設問では機能を制限し、記述力を問う設問で活用した

(2)対象児童に応じた支援体制の構築のために

①対象児童を決定するためのプロセスと判断基準の共有

・個別の指導計画が作られている児童の中で、「読むことや書くことの困難のために、従来の方法では、その子の学力を測ることが難しい状況」を抱えている子についてピックアップした。

・以下の点について、観察・評価を行った。

項目	チェックポイント
ギャップ	思考力や理解度に対して、テストの点数や記述量が極端に低くないか？
疲労度	読むことや書くことにエネルギーを使い果たしていないか？
有効性	ICTの手だてを用いることで、正答率や学習意欲の向上が期待できるか？

・校内で、対象としての妥当性が確認されたら、保護者・本人と面談し、支援の目的(正当な評価のため)を説明し、将来の進路(入試での配慮申請等)も見据えて、継続的な支援に向けての合意形成を行った。

②児童自身が主体的に参加する「試して・比べて・調整する体験」を実施

・複数の手立てを試行し、児童自身の言葉で「よかった点」「難しかった点」を言語化させることで、「これなら自分の力が発揮できる」という実感を持って手段を選択できるようにした。

・それらを比較して細かな点について調整することで、個に応じた手立ての形を構築した。

③ 入力スキルの段階的育成

・手書きの代替えとしてキーボード入力が必要なケースについては、スムーズに使えるスキルになっていない段階では、すぐに行える音声入力や教師による代筆や代入力を行い、並行してそれぞれに合った入力方法についてのスキルトレーニングを行なった。

・入力方法については、②で検討した適正の他に、本人の「これでやりたい」という気持ちも重視して選択した。

④個別の指導計画と連動し、情報を可視化

・単発の実践に終わらないよう、個別の指導計画の「合理的配慮」の項に実施の必然性と具体的

な手立てについて明記した。

- ・テストの際に必要な支援が、日常の学習場面でも行われているかについて見直した。

(3)校内の教職員の合理的配慮への理解と協力の促進について

① 研修を通じての意識改革

- ・事前アンケートを通じて課題を焦点化し、外部有識者(早稲田大学人間科学学術院 高橋麻衣子先生)からの指導助言を受けながら、計画的な研修会を実施した。

② 実践のフィードバックを通して必然性を共有

- ・対象児童へのテストにおける ICT を活用した実践の結果や様子について具体的な情報をフィードバックすることで、こうした手立てが正当な評価を受ける上で必要であるということについての意識を共有していった。

③個別相談の実施

- ・テストにおける合理的配慮の内容が、日常の学習場面でも生かされているかについて、遡っての個別相談を実施した。

(4)成果の発信

①LD 学会での発表

- ・自主シンポジウム「学びにくさのある子へのテスト場面での ICT 活用が開く未来①正当な評価と合理的配慮の必然性を共有する」を企画し、発表を行なった。
- ・参加者からは、多数の共感のコメントと、来年度の②の発表について期待する声が寄せられた。
- ・会場発表(参加者 100 人程度)に加えて、学会からオンデマンド配信に選ばれ、多くの人に視聴してもらう機会を得た。

②成果物の作成と公開

- ・本研究で得た知見について、「読み書きの困難を ICT で支える～テスト場面における配慮と実践のガイドブック～」を作成した。具体的な実施方法だけでなく、ICT を活用したテストの意義などについての情報もまとめたものを作成配布することで、読むことや書くことの学びにくさのために正当な評価を受けられない子ども達への支援の広がりを目指した。
- ・データについては、パナソニック教育財団のスクールフォトレポートスペースで、3月6日以降に公開予定であり、冊子については、市内の学校と希望者に配布する。

4. 代表的な実践

(1)読みにも書きにも学びにくさのある A さんへのテストの支援「試して・くらべて・調整する」

①介入前の状況

項目	チェックポイント
ギャップ	<ul style="list-style-type: none"> ・文字以外からの情報の理解はスムーズで、自分の言葉で説明することもできる。 ・社会や自然の事象に広く興味を持っており、図鑑や動画などから進んで知識を得ている。 ・授業中の発言や思考は豊かである一方、テストやプリントなどは空欄が多く、やり終えられないことが増えている。 ・音読はたどたどしく、注目すべき場所をしばしば見失う姿も見られた。

疲労度	<ul style="list-style-type: none"> ・読むことや書くことへの負荷が大きく、過度に時間がかかったり、書き終わっても「今何を書いたのか」がわからなくなったりすることがある。 ・テストやプリントの課題への拒否感が強く、いらいらする様子がある。
有効性	<ul style="list-style-type: none"> ・人による読み上げを試行し、口頭で回答させたところ、内容は十分に理解できており、音声情報の補いによる効果が見込まれた。 ・口頭での回答はスムーズだが、それを書こうとすると文字の想起に時間がかかり、途中で内容がわからなくなってしまう様子が見られ、機器を活用しての入力による効果が見込まれた。

※読むことや書くことに学びにくさを持っており、従来のテストのやり方では、本来の力を発揮できず、正当な評価を受けることができていない状況が推察された。

※学びにくさは認知されていたが、日常の学習場面では、「担任が個別に声をかける」「課題を減らす」といった対応が中心で、テストでの合理的配慮は提供されていなかった。

②「読むこと」を支える手段の検討～情報の「入り口」を整える～

・4つの方法を「試す」「比べる」

市販テストの読み上げデータ活用

→設問にしか音声データがないため、問題文に音が必要なAさんには適さなかった。

音声ペンの活用→操作もわかりやすく、使いやすい様子だった。

端末のテキスト認識機能の活用→撮影から文字認識まではスムーズだったが、「読み上げ」のボタンを表示させる所で時間がかかっていた。

専用サイトの活用→手元のテストと同じビジュアルの画面で読んで欲しい場所を選択できるので、使いやすい様子だった。

③「書くこと」を支える手段の検討～アウトプットの「出口」を広げる～

・4つの方法を「試す」「比べる」

音声入力→考えを言語化することは得意なので、スムーズに使えた。

ローマ字入力→スタート時点では、学習は終わっていたがそもそもローマ字のルールも入っておらず、ローマ字表があっても探すのにかなり時間がかかる状態だった。ローマ字への変換の負荷も高かったが、本人が「ローマ字入力ができるようになりたい」という意欲を持っていた。

50音キーボード→50音の並び方のルールは知っていたが、キーが多いため探すのに時間がかかっていた。オンスクリーンキーボードのため画面が見づらくなるのも、使いづらい様子だった。

フリック入力→キーが少ないのはいいが、表示されていない文字を探すのに時間がかかったり、頻繁に他のキーを押してしまったりする様子が見られた。

④ Aさんが力を発揮できるテストの形へ「調整する」

・読むことへの支援については、「音声ペン」と「専用サイト」の2つの手立てがストレスなく使える様子だったが、書くことの支えも必要なAさんにとって、「音声ペン」の単独での使用は、

「入力ができるのに出力がスムーズにいかない」様子が見られた。

・「音声ペン」と「テキスト入力」を組み合わせる手立ても考えられたが、最初から両方が成立する手立てとして、専用サイト「もじソナ」を活用した。

・入力については、Aさんの入力スキルの実態から当面は音声入力を活用し、本人の希望であるローマ字入力のスキル習得のための取り組みを並行して行った。

⑤自立した手立てにしていくためのプロセス

・読み上げ→読んで欲しい場所をタップするというシンプルな操作なので、すぐに使いこなすことができた。

・入力→音声入力もすぐに使うことができた。誤変換をした時も、「消しゴムで消す」「書き直す」といった負荷がないため、入力をし直すことにストレスは感じていない様子だった。

→本人の希望と将来的な汎用性を考えて、並行してローマ字入力習得に向けての取り組みを行った。ローマ字入力は、「ローマ字に変換しながらのキー探査」が必要で、習得には時間がかかることが予想されたので、「確認して確実にやり終えられる」「時間制限なく焦らず取り組める」「負担の少ない量を設定して反復を可能にする」ことを意識した課題を設定した。

⑤ 成果と課題

【成果】

・評価の妥当性と処理速度の向上

従来の方法だと、45分の制限時間内に半分程度しか記述できず、空欄も目立っていたテストにおいて、「読み上げ」と「音声入力」や「ローマ字入力」を併用したところ、約20分で全問を解き終えることができた。正答率も9割前後に達しており、読む・書くことの障壁を排除することで、Aさんが本来持っている内容理解の状況を正當に評価できる環境が実現した。

・「考えのスムーズな出力」による自信の獲得

当初は習得に時間を要すると予想されたローマ字入力も、時間制限のない環境で「文章を綴る」体験を重ねたことで、実用レベルまでスキルが向上した。文字を書く負担から解放され、思考をスムーズにアウトプットできるようになったことが、Aさんの大きな自信へと繋がっている。

・日常の学習場面への波及効果:

テスト場面での有効性が可視化されたことで、日常の学習場面においても「音による情報の補完」や「入力手段の選択」が日常化してきた。Aさん自身も「問題が聞けるとよくわかるし、音声入力やタイピングだと途中で書きたいことがわからなくなるからいい」と語っており、ICTが自己の学びを支える不可欠な手立てであることを自覚し始めている。

【課題】

・手立てのバリエーションの拡充:

今回の比較検討において、現時点では選択されなかった「端末のテキスト認識機能」等についても、日常の多様な場面での自立を助ける有効な手段となり得る。意図的に操作体験を積む機会を設け、Aさんが状況に応じて使い分けられる「手立ての引き出し」を増やしていく必要がある。

・「教師主導」から「自己選択」へのステップアップ:

現在は教師が活用のを設定しているが、今後はテスト以外の日常的な場面においても、Aさ

ん自身が状況を判断し、習得した手段を組み合わせることで課題を解決できるよう、自律的な活用を促す環境設定と体験のプロセスを構築していくことが重要になる。

(2) 教職員の意識変化を目指した取り組み

合理的配慮の提供が進まない背景の一つである「教員の意識」について、最もハードルが高いと思われるテスト場面での実施について計画的な研修会を行うことで、変容を目指した。

① 外部有識者による研修会を通じて

- ・外部講師による専門的な知見（認知科学的視点や法的根拠）を取り入れたことで、教職員の間で「合理的配慮は教育の義務である」という認識が共有された。

- ・「テストは何を測ろうとしているのか」という目的に照らして合理的配慮や実施方法の検討がなされなければならないという認識が共有された。

- ・「テストは他のみんなと同じ方法でないと不公平ではないか」という根強い意識に対して、「同じ方法で実施することの不公正」や、何の目的でテストをしているのかを問い直すことの大切さについて、ワークショップ形式で自校の実際の事例を踏まえながら学んだ。

② 現場の具体的事例を中心とした研修会を通じて

- ・実際の漢字テストの間違い分析の比較や、テストでの合理的配慮を受けることで追い詰められていた状況や不適応の状態が改善した事例などの情報を共有することで、実際の子どもの姿をイメージしながらその必要性を共有した。

- ・学びにくさに合わせた支援方法や教材・教具などの活用事例を知る機会を持つことで、「自分にできることは何か」を具体的にイメージする機会を持った。

5. 研究の成果

(1) テスト場面における ICT 活用の必然性と実証的成果

ICTを活用したテストを実施した全てのケースにおいて、その導入の必然性を裏付ける顕著な成果が得られた。

従来、対象児童に対しては、その学びにくさについては気づかれていながら、「丁寧に書かせる」「課題量を減らす」といった、実態と乖離した、あるいは自力解決に繋がらない対応に終始しがちであり、「努力しても報われない」という学習性無力感を募らせてしまっていた。本研究では、「他の手立てを試す」「効果のない方法に固執しない」「前提スキルの習得から再考する」というプロセスを実践した。その結果、テストでの ICT 活用の必然性が示されたことで、そうした手立てを日常の学習へも展開する動きが広がり、児童が自信と意欲を取り戻す足掛かりとなった。

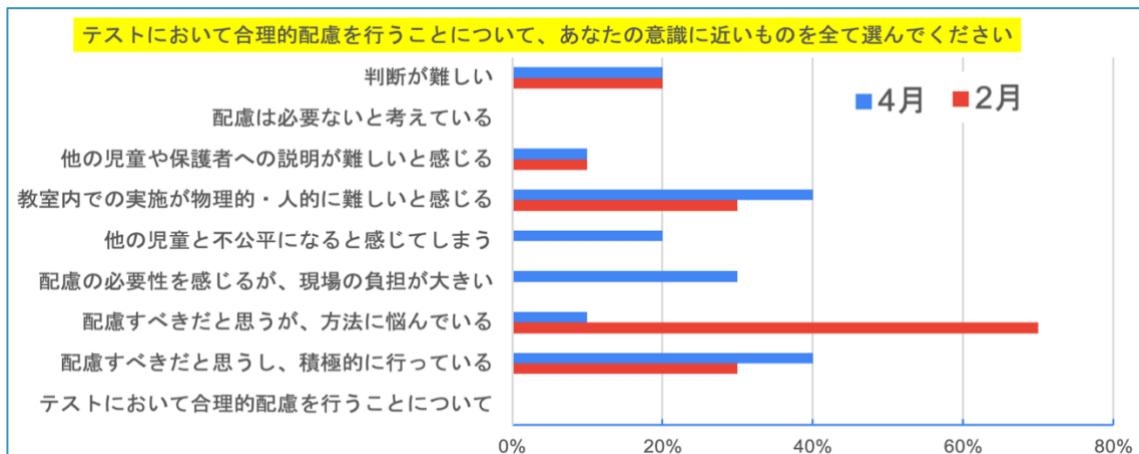
(2) 合理的配慮の再定義による教員の意識変容

年度初めに行ったアンケートでは、多くの教員が合理的配慮を「理解している」と自認していたが、研修と実践を経て、その認識には変化が見られる。

特に通常学級担任は、4月当初から全員が、「合理的配慮について理解している」「対象児童に対して、日常の学習場面での合理的配慮は必要」「テストでの合理的配慮が必要だと感じる場面がある」と回答している。しかし、実際の提供に関しては、半数が「該当児童がいなかった」「実

施までの必要性は感じなかった」と回答しており、実施には消極的な姿勢が見られた。それが2月のアンケートでは、「4月と現在で、合理的配慮やその実施についての意識に変化はありましたか?」という質問に全員が「ある」と回答している。また、現時点で4月当初の意識について振り返ってもらくと、「わかっているつもりでいたが、権利保障とまでとらえていなかった」「該当児童がいなかったと回答したが、今思えばいたことがわかる。『苦手だな』と見てはいたが、学ぶための支えが必要だという意識が持てていなかった」「合理的配慮をしてきたつもりでいたが、その場その場で手を貸すことで終わってしまっていて、学び方の保証とまでは考えが至らなかった」といった意見が聞かれた。

また、テストでの合理的配慮の実施についての意識にも、大きな変化が見られた。



上のグラフは、合理的配慮をテストで提供することに関する意識調査の1項目である。「児童の権利保障」という考えが共有されたことで、「不公平ではないか」「負担が大きい」といった項目は0になり、実際の提供方法に悩む姿が確認できる。「積極的に行っている」という回答は減っているが、個別にインタビューしたところ「4月は自分は積極的に行ってきたと思っていたが、研修を経て十分ではなかったことがわかった。今はまだ不十分だと感じている」との回答が得られた。そうした意識変化につながった研修内容について複数回答を求めたところ、全員が「合理的配慮の提供は、特別扱いをするのではなく学びの本質への到達方法を考える」を挙げていた。

かつては、合理的配慮のためのICT活用が進まない理由を「ICT環境の未整備」に求められがちであったが、1人1台端末が実現した今、障壁は「提供者側の意識」にあることが今回の取り組みの中で浮き彫りとなった。

「支援なしの点数を確認してから直しで指導する」という従来の手法は、一見有効に思えるが、高橋先生の研修でも「小学生で直しから効果的に学べる子は少ない」との指摘を受けた。読み書きの障壁により情報が届かず、適切な出力手段を持たない児童にとって、それは単に「できない体験」を強いる不公正な評価でしかなかった。本研究を通じ、合理的配慮を「努力不足を補う優遇」ではなく「子どもの権利保障」と捉え直せたこと、それを校内で共有できたことは、具体的な支援提供への大きな弾みとなった。

(3) テスト場面を切り口とした波及効果の創出

通常、日常の配慮をテストへ繋げるのが一般的だが、本研究ではあえて「最も抵抗感が生じや

すいテスト場面」を切り口に研修と実践を重ねた。評価の公平性が問われる場面で、合理的配慮の本質（目的と手段の分離）を徹底して議論したことで、教員の理解が深まり、結果として日常的な配慮の提供も自然に促進されるという「逆のアプローチ」による成果を収めた。これは本研究の独自性であり、重要な意義であると考えられる。

6. 今後の課題・展望

（1）継続的な権利保障としての合理的配慮の定着

合理的配慮は単年度の取り組みで完結するものではなく、学ぶための前提条件としての権利保障である以上、今年度の成果は継続されなければならない。「個に応じた実践」と「提供者側に求められる意識」を途切れさせず、対象児童が常に安心して学べる環境を維持していくことが重要だ。具体的には、個別の指導計画に支援内容だけでなくその「効果」についても明記し、担任や学年が変わっても一貫した配慮が受けられる「継承の仕組み」についても引き続きの検証を行いたい。

（2）多様な学びを自然に受け入れる学校文化の醸成

必要な児童が必要な支援を当たり前自ら選択できる環境を整えることで、対象児童への支援を特別視しない、学校全体の人権意識の向上を目指す。学びの多様性を自然に受け入れ、互いの学び方や学びやすさを尊重し合える素地を、ICT活用を通じて重ねていきたい。

（3）将来の自立に向けた「セルフアドボカシー」の育成

小学校段階で自分の「学びやすさ」を正しく理解し、そのための手立てを習得することは、将来の自立に向けた極めて重要な基盤となる。中学校以降の定期テストや入試などの公的な場面においても、自ら必要な配慮を求め、適切な支援を享受できる「自己選択・自己決定」の力を育んでいきたい。

7. おわりに

本研究は、テスト場面での ICT 活用を切り口に、読み書きに学びにくさがある児童の「学びの権利」をいかに保障するかを追究してきた。

実践を通じた最大の成果は、ICT が「できないことを補う道具」から、児童が「本来の力を正當に発揮し、自信を取り戻すためのインフラ」へとその意味を変えたことにある。また、提供側である教職員にとっても、「全員に同じ方法を強いる不公正」から「一人ひとりの特性に応じた実質的な公正」へと評価観を転換させる重要な契機となった。

「テストで受けた配慮を日常へ」という従来の流れを逆転させ、「テストという最も高い障壁」から切り込んだ本研究のアプローチは、結果として日常の学習場面での支援を広げた。今回の取り組みを一過性のもので終わらせることなく、どの子も安心して学べる「互いの学びの多様性を受け入れる学校」を目指して、次年度以降も取り組みを継続していきたい。

8. 参考文献

- ・朝日新聞社『学びに凸凹のある子が輝くデジタル時代の教育支援ガイド-子ども・保護者・教師からの 100 の提言』.学研プラス,2021,160p.
- ・菊田史子・河野俊寛.『読み書き困難のある子どもたちへの支援: 子どもと ICT をつなぐ KIKUTA メソッド』.金子書房,2023,120p.